

書評「渡り鳥の世界―渡りの科学入門―」

岡久雄二 (立教大学大学院理学研究科生命理学専攻)*

中村 司著, 山梨日日新聞社,
2012年1月, 1,200円+税, ISBN: 978-4897107264

海を越え, 山を越え, 時には地球何周分をも旅する渡り鳥の生態は未だ多くの謎に包まれている。我々標識調査員が鳥類の移動経路の解明に情熱を傾けているように, 鳥類を研究する者にとって, 渡り鳥の生態の解明は最も魅力的な研究課題の一つである。渡り鳥の生理学的研究の第一人者であり, 日本鳥類標識協会の名誉会員でおられる中村先生が渡り鳥に関する本を書かれたと聞き, 読まずにはいられなかった。

本書は8章からなり, 渡りの進化に関する諸説, 日本周辺の鳥類の渡り行動, 渡り鳥が立ち向かう苦難や渡りの方向を決める身体的メカニズム, 生理面から見る渡りの準備, さらに近年渡り鳥が直面している問題や, 中村先生がどのように渡りの研究に携わってこられたのかまで, 渡り鳥に関する広い知見が述べられる。

なかでも, 思わず「ほうっ」と溜め息をついてしまうような, 中村先生御自身による研究を一息に読み進められることは, この本の読者の特権だろう。渡り鳥が夜に行う「渡りの衝動 (night restless)」と呼ばれる行動が, 気温や湿度, 日長により変化すると共に, それらは脂肪蓄積やホルモンと密接な関係を保っているという一連の研究結果はとても明快だ。また, シマセンニュウが日本国内を移動していくなかで困難な渡りを乗り越えながらも, 体重を増加させ, 繁殖器官を発達させ, 繁殖に向けて生理的な準備を整えていくという知見は極めて興味深い。恥ずかしながら, 私は1960年代の日本において渡り鳥に着目した飼育実験や生理学的研究が進められていたことをあまり知らなかったため, これらの見事な研究例に衝撃を受けた。本書は渡りの科学入門とされているが, 内容は多くの学術的知見が網羅されており, 引用文献もしっかりと記されていることから, 渡り鳥に興味を持ち始めた人だけでなく, 実際に研究に関わる人にとっても資料的価値が高いと考えられる。

話は研究のみにとどまらず, 戦後間もなく, まだ東京が焼野原の時代に鳥類研究を進められた御自身の研究人生や渡り鳥研究を通じた世界の人々との談話にも及ぶ。これらは渡り鳥の研究が世界でどれほど注目されているのか, 我々が行っている鳥類研究がどのように発展してきたかということを見せてくれる。

標識調査員という視点から眺めてみると, 本書の研究例の中に, 標識調査員が情報を収集することによって, 発展させられるように思われるものがあることに気が付く。例えば, 先に述べた渡り鳥の移動中の体重変化, 種ごとの渡り時期の比較などである。本書を見本として, 我々標識調査員が野外調査に励めば世界を驚かせられる研究結果を得ることができるかもしれない。本書は, 鳥類の移動にロマンを抱く我々標識調査員にとっては, 一読すべき名著であろう。